

授業

ELC English Learning Center ELCでは9月と同様に3種類の授業を継続して受けた。英語で文章を書く機会が増えるようになり、英語で書く文章と日本語で書く文章との違いについて考えた。一般的に英語の文章は1つの文が長い。特に意味定義やものごとの説明においては文章が非常に長くなることがある。また、そのような文章が学問的であって良いとされる。それに対して、日本語の文章は1つの文が短い。簡潔に文章を区切って述べることが重要だとされる。私は書く内容によっては英語の方が描写しやすいと感じた。意味や状況の説明文がそれに当たる。現在英文法の授業では、形容詞節や名詞節などを勉強している。これらの技法によって説明文が非常に書きやすく、読みやすくなる。これらは英語の文章を書く上で非常に重要でよく使われる文法だ。また、最近ではメモをとる時には日本語よりも英語を使うようになった。アルファベットは漢字に比べて画数が少ないため早くメモを取ることができる。より早く先生の話す内容をノートに書き留めることは授業の内容を理解する上で重要だ。留学生活は残り約3ヶ月となった。この三ヶ月でより、学問的な文章を書き、スピーチができるようなことが私の目標だ。

Academic Class 10月の心理学の授業（Attitude & Social cognition）では学生の社会、集団における態度について学んだ。レポート課題では学生に「一週間で、授業外で1クラスにつき2、3時間以上勉強する態度」についてアンケートをとり、その内容をまとめた。質問紙の書き方については金沢工業大学で学んだことを生かすことができた。しかし、結果のまとめる段階では理解することが非常に難しかった。見たことがないような計算方法を理解し、非常に多い英語の略文字が何を表しているのかを知ることが難しいと感じた点だ。その結果、毎週月曜日にはOffice Hourに行くようになった。Office Hourとは学生が授業の内容について質問や疑問があるときにそれらを担当の教授に相談することできる時間のことである。私にとってRITの3年生の授業は学問的な英語を使用する面で難しいものだった。そのため、Office Hourに行くことはとても有効だった。私がOffice Hourを通して最も嬉しく、楽しく感じた時は教授と態度の構造について教授と話した時だった。自分の意見を教授に英語で話してそれを納得してもらえたことが嬉しかった。私は人間の態度は様々な方向と強さを持っていると学んだ。基本的に態度はポジティブな態度とネガティブな態度を持っている。また、それぞれの態度には強さを持っている。非常に強い態度から非常に弱い態度まで態度の表現の仕方は様々である。様々な場面や要因ごとに態度の方向と強さを矢印に表すとその人の態度を立体的に見てとることができる。そのように考えることができたことが嬉しく、楽しかった。残りの留学生活ではレポート課題などを通して英語による心理学の理解を深める。

Language Partner

10月に入り、Language Partnerを持つようになった。Language Partnerとは異なる使用言語を持つもの同士がコミュニケーションをとったり、互いの文化や言語について教えあったりするパートナーのことだ。私のLanguage Partnerは聴覚障害を持った学生でその学生は日本語を勉強している。互いに知っていることを教えあうことがLanguage Partnerの目的だ。私は聴覚障害を持った学生とのコミュニケーションを通して手話について学びたいと思った。彼らはどのような場面で苦労しているのか彼らの立場を考えてみたいと思ったからである。また、様々な製品、システムなど社会に出回るあらゆるものにおいて聴覚だけでなく視覚障害などを持った人たちが考

慮したものであるべきだ。従って彼らの立場になって考えることは非常に重要なことだ。

我々は1週間に1回ミーティングを行う。主にASL American Sign Language (英語の手話)と日本語について互いに教えあう。私は手話による自己紹介から日常会話でよく使うフレーズなどを学んでいる。ASLの面白いことは1つの単語が非常に覚えやすいことと、文法が非常に簡単なことである。ASLは主に手と顔の表情によって表現されるが、アルファベットや数字、良いことや悪いことの表現の全てに意味があり、それらの意味が非常に分かりやすい。またひとつひとつのサインの順序に大きな決まりはなく、ASLを学ぶことは大変難しいことではない。私は毎回のミーティングにおいてASLで学びたい言葉や文章を紙に書き、それらをパートナーに見せることでASLを学んでいる。現在、私は学んだASLを使う機会があまりないが、学校外で私が学んだことが誰かの助けになれば良いと思う。

アカペラコンサート

10月17日にアカペラ部でコンサートパフォーマンスをした。我々が歌った曲はAIの「Story」、アニメ「エヴァンゲリオン」のテーマソング「残酷な天使のテーゼ」、「ゴールデンボンバー」の「女々しくて」の3曲であった。アニメの影響もあり、RITには日本のアニメに興味を持っている学生が多い。そのため、RITには日本の曲を知っている学生も多い。アカペラ部は合計で7グループあり、私が所属するアカペラグループは「雷 Kaminari」という名前だ。我々は日本語の曲を中心に男女混声で歌う。我々はソロ、ソプラノ、アルト、テノール、ベース、ボイスパーカッションの6声で歌うグループであり、私は主にベースを担当している。舞台上がってパフォーマンスをすることは非常に緊張した。コンサートホールはいつもの練習場とは異なり、声が響きにくいと感じた。他のグループのパフォーマンスを聞いてそれを感じた。しかし、コンサート終了後に友達から「良い演奏だった」と評価してもらえたことはとても良かった。現在も次のコンサートに向けて練習を続けている。次回のコンサートでは会場で声が響くように意識すること。また、6つのパートがさらに結合することが目標だ。

囲碁クラブ トーナメント

10月から囲碁クラブに参加することになった。10月24日には囲碁のトーナメントが学内で行われた。会場には24人の参加者が集まり、中には一般の参加者もいた。大会の成績は4戦中4回勝利することができた。参加者の実力に差があるため、数人のグループ内での対局となった。私はRITで囲碁の対局が出来たことはとても良い経験になったと感じている。日本人とは異なる対局方法や手筋や定石の考え方など、すべてにおいて興味深いと思った。アメリカの人は様々なことに興味を持っていてどのような人間も拒むことなく歓迎してくれる。アメリカ人のそのような態度は日本人が見習うべきだと感じた。

しかし、囲碁を通して気になることもあった。私が最も気になったことは対局の前と後の挨拶についてだ。日本で対局をする時、我々は対局前に「よろしくお願ひします」対局後に「ありがとうございました」という。これが対戦相手に対する礼儀であって、非常に大事なことだと思う。しかし、アメリカで囲碁をした際その挨拶に違和感を感じた。対局前には「Have a good game」という人もいれば、何も言わずに対局を始める人もいる。対局後には「Thank you」と言うが、日本での挨拶と比べてその重みが大きく違うと感じた。

これと似た様なことが食事に関しても言える。日本では食事前には「いただきます」食

事後には「ごちそうさまでした」と言うが、アメリカに来て食事をする際にはそれらを言わないことに対してすこし違和感を持った。一般的にはこれらを言わないことは大きな問題ではないかもしれないが、食べ物に対する感謝や料理を作ってくれた人に対する感謝の意味も込めて「いただきます」「ごちそうさまでした」を言うことは重要なことだと思う。同様に囲碁の対局前後でも対局相手に対する尊重の意を込めて挨拶をすることは重要だ。